

児童養護施設保育士の専門性にかかわる一考察

— 児童養護施設職員への保育実習に関するインタビュー調査結果から —

Study on Professionalism Required for Childcare Person in Children's Institution

— From the Results of Interview Research on Practical Training with Workers in Children's Institution —

高井 由起子*・森 知子**

Abstract

This study discusses an improvement in practical training in children's institutions. In the children's institutions, some workers feel difficulty in supporting for the children. The interview research was conducted with the workers in the children's institutions. The inquiries were "What challenge do you request for student apprentices during practical training?", "Is there any special attempt to accept the student apprentices in practical training?", "Is there any special assignment or training for the student apprentices in your institution?", and the like. On the basis of the interview results, I searched for more specific ends or challenges in practical training in the children's institutions.

As an interview result, it was found that many workers provide "enjoyable experience" or "relationship to children in a positive event" with the student apprentices during Childcare Practical Training I, in consideration of the fact that many student apprentices have insufficient knowledge of the children's institutions. On the other hand, as for Childcare Practical Training III, some workers described "We ask a trained student apprentice to go with the children to see a doctor or buy something.", and "We explain the outline of the common sense parenting training and individual support program, and make an effort to convey the importance of supporting and taking an action for the children." Another worker described that "We want the student apprentice to establish an individual support program, but actually, it is difficult to achieve the desire because the period of the Childcare Practical Training III is too short for the student apprentices to understand the children."

It then discusses future issues.

キーワード：施設保育士の専門性、児童養護施設、児童虐待、保育実習

1. 研究目的

本研究は、近年複雑な家庭環境に育つ子どもたちと向き合う、「児童養護施設保育士」の専門性を促すための実習のあり方を明確にするものである。

保育士養成課程において学生は、保育実習Ⅰ（保育所実習2単位と保育所以外の施設実習2単位）を必修科目とし、加えて保育実習Ⅱ（保育所実習2単位）・保育実習Ⅲ（保育所以外の施設実習2単位）のいずれか一方を必ず選んで修得することになっている（表1）。児童養護施設は保育所、児童館に次いで多い児童福祉施設であり、児童養護施設に勤務する保育士は、保育士養成において非常に重要な役

割を担っているといえる。本研究では、児童養護施設で専門職として勤務する保育士の専門性についても追及する。

2. 保育士養成に係る実習の意義

保育士養成において、保育実習は学生の専門的成長に大きく寄与するものであり、実習に関する研究の発展は保育士養成の中心的な課題の一つであると考えられている¹⁾。特に、保育士資格が2001（平成13）年に名称独占資格として法定化されたことにより、保育士の専門性を高める養成教育のあり方として、理論と実践を統合させる保育実習の場は、各養成校におけるカリキュラムの柱ともなっているとい

* Yukiko TAKAI 関西学院大学教育学部

** Tomoko MORI 聖和短期大学保育科

表-1 保育実習実施基準 履修の方法

実習種別 (第1欄)	履修方法(第2欄)		実習施設 (第3欄)
	単位数	施設におけるおおむねの実習日数	
保育実習Ⅰ (必修科目)	4単位	20日	(A)
保育実習Ⅱ (選択必修科目)	2単位	10日	(B)
保育実習Ⅲ (選択必修科目)	2単位	10日	(C)

備考1 第3欄に掲げる実習施設の種別は、次によるものであること。

(A)…保育所及び乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター（児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る）、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所（生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る）、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のごみの園

(B)…保育所

(C)…児童厚生施設又は児童発達支援センターその他社会福祉関係諸法令の規定に基づき設置されている施設であって保育実習を行う施設として適当と認められるもの（保育所は除く）

備考2 保育実習（必修科目）4単位の履修方法は、保育所における実習2単位及び（A）に掲げる保育所以外の施設における実習2単位とする。

備考3（略）

2013（平成25）年厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（雇児発0808第2号）別紙2「保育実習実施基準」より抜粋。

える。全国保育士養成協議会専門委員会によってまとめられた「保育実習指導のミニマムスタンダード」には、「学術研究の多様な分野において、実習研究は独立した対象領域としての概念と固有の専門的文化を構成しており、保育実習指導の科学化と理論化を志向する興味深い立場と方法論が提示・展開されている。」²⁾と述べられており、保育士養成における実習研究への期待とそのあり方が示されている。

保育士養成課程において必修科目となっている「保育実習Ⅰ」の教授内容（局長通知）をみると、保育所実習では「保育課程と指導計画の理解・活用」が明記されているのに対し、施設実習では「支援計画の理解・活用」、そして、子ども理解については「個々の状態に応じた援助やかかわり」ということが明記されており、保育所実習よりも一人一人に応じた援助のあり方を学ぶ視点が明確にされている。必修科目である保育実習Ⅰの履修方法に示されている保育所以外の施設は、多様な種別にわたっており、実習を行う学生に対し、施設実習の目的と方法を明確に指導していくことが求められる。施設実習における学びは、保育専門職としての意識を培う上で重要なものとなる。本稿では、施設実習の対象施設となっている児童養護施設に視点をおき、実習のあり方を考察する。

3. 研究の学術的背景

近年において、児童養護施設では、虐待を受けた経験のある子どもが59.5%であるという（2013（平成25）年、厚生労働省³⁾）。虐待経験のある子どもは、その経験がゆえに、人間関係を潤滑に取るのが困難な場合が多く、試し行動が見られたり、言葉や身体による暴力により気を引こうとしたり、気持ちを表現することもある。このような子どもに対応する保育士や児童指導員は、それがために専門的な知識と技術、高い倫理観をもって職務にあたる必要性がある。

橋本（2013）は施設実習に関連する論文137本を分析し、保育所以外での保育実習や保育実習指導に関係する研究の現状の到達点を確認する研究を行っている。その結果、この分野における研究が研究者自身の個人的な問題意識や、研究者の所属している教育機関の問題意識から開始されているということであった。つまり、この領域における、普遍的な成果や課題は発見できていない状況であった、ということである。そして全国的な研究を行い、普遍的な取り組みをおこなうことの必要性について言及している⁴⁾。

また、学生への調査研究はいくつか見られる。中島（2011）は児童養護施設等の実習を終えた学生を

対象にインタビュー調査を実施し、学生の意識変化等を把握している。居住型施設実習では子ども虐待の問題や発達障害の課題等で学生の戸惑いが予測されるため、その実習時期について、事前の指導、実習に行くまでに学ぶ科目の内容、カリキュラム等をふまえて慎重に検討しなければならないことが明らかになる結果であった、ということである⁵⁾。

岡田(2008)は保育士取得をめざす学生が施設実習でどのような体験をしているか、具体的にはどのような生活支援内容が実習達成感と関連しているかといったことを検証している。その結果、学生の生活支援に関する自己効力感と実習達成感について関連が見られる結果となった。ここでいう生活支援とは、次に示すとおり大きく4つあるとしている。つまり、「利用者にあった生活支援を実施することができる、利用者に必要な支援を考えることができる、といった専門的支援への自己効力感」「利用者の言動に対して感情的に対応しない、利用者が好む話題を提供する、利用者の気持ちになって考える、といった尊重的支援への自己効力感」「利用者に優しい気持ちでふれ合うことができる、利用者の目線に合わせて話をする、といった優しさ支援への自己効力感」「利用者の排泄の支援ができる、利用者の食事の支援ができる、といった身体的支援への自己効力感」の4つである。これらのうち、実習を経て高まりがあったのが「尊重的支援への自己効力感」であったという。そして総じてこれら4つの生活支援に関する自己効力感と実習に関する達成感は相関関係にあったということである。つまりは、支援に関する自己効力感があまり得られないと実習に対する達成感も得られないということである⁶⁾。

池田ら(2013)は、施設実習前後の学生の心的発達についてはいくつか研究内容があるが、その具体的な学びの内容についてはこれまで十分検討がなされていないことを問題意識とし、学生が実習を通してどのようなことを学んだかを調査研究している。その結果、実習前は例えば利用者に対して「怖いのではないか」「暗いのではないか」といった「未知への不安」が強く感じられるものであった。しかし実習を経て「実習をしてみて(少しこわいのかなという)気持ちはなくなった」等の肯定的な認識へと変化があることが見られるなど、「未知でなくなった」安心感でもあることが明確になった、ということである⁷⁾。

著者の一人である高井は、2011年11月に、幼児・初等教育者や保育士を目指す学生に対して今まで体験、また見聞きしてきた児童福祉施設や幼稚園・小学校等における不適切なかかわりや暴力等について質問紙によりアンケート調査を実施した。対象はS短期大学、K大学、S大学の保育士、幼稚園教諭、小学校教諭の資格取得をめざす学生とし、集合調査法を実施した。期間は2011年11月下旬から12月中旬である。有効回答は279であった。この有効回答の内、保育所実習経験者は262、幼稚園教育実習経験者は268、児童養護施設、乳児院、母子生活支援施設等、保育士資格取得にかかわる社会福祉施設実習経験者264、小学校教育実習経験者10であった。

実習中、対応に困った子どもや利用者との出会いの有無について、保育所実習経験者262人の内、78.2%の205人、幼稚園教育実習経験者268人の内、76.5%の205人、社会福祉施設実習経験者264人の内、92.4%である244人、小学校教育実習経験者10人の内、90%である9人が、それぞれ経験している結果となった。また、対応に困った子どもや利用者に対して、不適切なかかわりをした経験の有無について聞いたところ、「ある」と回答した人は64人、「しそうなったことがある」と回答した人は102人、両方あわせると何らかの実習経験のある人の61.0%である166人が不適切なかかわりについて、非常に身近なこととして体験したことがわかった⁸⁾。

それだけでなく、児童養護施設職員に対する趙(2014)による調査を見ても、職員がバーンアウトに陥るリスクが高いことを指摘しており、それを防ぐためには、個人的特性を踏まえた多様な職員集団を支援するための研修やスーパービジョンの必要性を示唆している⁹⁾。

このように、学生だけでなく職員でさえも対応に困難性を抱く経験となる児童養護施設含む居住型社会福祉施設であるが、実習を行う際、いまひとつ、はっきりとした目的を見出すことなく実習しているように想像する。例えば保育所であれば設定保育や全日実習があり、記録や指導案についても重要課題として、明確なものがある。児童発達支援センターにおいても、保育所と同様の課題があるだろう。それが、保育実習Iで多くの学生が行く、また施設数としても多く、保育士も多く勤務している児童養護施設では、こういった目的や明確な課題がないまま

実習に取り組んでいるのではないかと推測する。

これらについて、例えば「現場の保育士はどのような課題をもって実習に取り組んでほしいと思っているか」「実習受け入れに際し工夫していることはあるか」「施設で独自の課題や実習を課す具体的な取り組みがあるか」等、インタビューを通して把握していくものである。そしてそれをもとに、児童養護施設の実習目標や課題として具体的なものを考察していく。

子ども・子育て関連3法（「子ども・子育て支援法」、「認定こども園法の一部改正」、「子ども・子育て支援法及び認定こども園法の一部改正法の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律」）が2012（平成24）年8月に成立し、それを基本とした「子ども・子育て支援新制度」が2015（平成27）年度より施行された。施策の目的には、地域の多様な保育ニーズに対応した子育て支援の充実があげられ、認定子ども園の普及や待機児童解消の取り組みが促進されることになる。今後、保育教諭という新しい免許・資格が注目されてくると予測されるが、保育士—特に施設保育士の専門性は、どのような位置付けになっていくのだろうか。子どもの育ちに視点をおいた保育の議論からどこか置き去りにされてはいないだろうか。本研究は、施設保育士の専門性に焦点を当てることにより、多様な保育を担う保育の専門家としての職性を明確にし、今後の保育士養成のあり方を提言するうえでも意義のあることだと考える。

4. 調査の概要

調査の目的を説明し、調査内容に賛同、協力を得ることのできた児童養護施設の職員にインタビュー調査を実施した。実施前に、「調査結果等について、個人名や所属等が公表されることは一切ないこと」「個人情報にかかわる事項を質問することがないこと」等倫理的配慮について明記した依頼文書を送付した。

調査実施時期は、2014年11月～2015年1月、調査対象者は、5施設5名、調査場所は対象者が勤務する児童養護施設であった。質問項目としては、①保育実習Ⅰ、保育実習Ⅲで実習生に経験させている実習内容、②施設独自で実習生に課題として取り組ませている内容、③ご自身が実習で体験してよかった経験、④ご自身が実習で体験して困った経験、⑤その他である。

5. 調査結果

インタビュー調査の結果、得られた調査協力者の属性を表-2に示す。

(1) 保育実習Ⅰで体験させていること

まず、保育実習Ⅰで実習生に体験させていることについて質問をした。

結果は調査協力者5名（5施設）のうち、以下のような回答が得られた。

（数字は人数（施設数））

起床の手伝い 4 食事の準備、配膳等 5 学習の補助 4 設定保育 1 洗濯 5 掃除 5 衣類の整理 5 衣類の補修 2 自由遊び 3 絵本の読み聞かせ 3 手遊びの実践 2 保護者との面談の同席 0 心理士による心理面接場面の見学 0

(2) 保育実習Ⅲで体験させていること

次に保育実習Ⅲで体験させている内容について質問をした。結果は以下の通りであった。

（数字は人数（施設数））

起床の手伝い 4 食事の準備、配膳等 5 学習の補助 4 設定保育 1 洗濯 5 掃除 5 衣類の整理 5 衣類の補修 2 自由遊び 3 絵本の読み聞かせ 3 手遊びの実践 2 関係機関との連携（児童相談所の児童福祉司との面談、小学校等での合同会議等）に立ち会う 1 一人の子どもを担当させる等の個別対応 1 コモンセンスペアレントトレーニングの説明 2 支援計画案の作成 2 支援計画の説明 3

また、それぞれの実習について以下のような意見が得られた。

・保育実習Ⅰと保育実習Ⅲで、実習内容に大きな違

表-2 調査協力者の概要

	資格	施設職員歴	施設内での役割	実習担当	性別
1	社会福祉士	30	副施設長		女性
2	保育士	16	主任保育士		女性
3	社会福祉士	10	児童支援員	実習担当	男性
4	社会福祉士	10	児童指導員	実習担当	男性
5	社会福祉士	10	児童指導員	実習担当	男性

いはないが、実習生と子どもの関係性が全然違う。

- ・病院の付き添いや子どもの買い物や買い出しの付き添いは、初めての実習生にはできないが、経験のある実習生（保育実習Ⅲで実習を履修している学生）には任すことが出来る。
- ・保育士養成の実習では、初日と最終日の職員ミーティングに参加する。その他は、子どものかかわりを中心に日常の生活援助をしながら学んでいくことが主である。
- ・学生のニーズに応じて体験してもらう（食育をやりたいという学生にハンバーグ作りの体験、支援計画案を作成し、添削してほしいという学生に対応、等）

いずれも、保護者の面談同席、施設内心理療法の見学、ケース会議の同席、個別支援計画の作成などは行っていない。ちなみに社会福祉士はカリキュラムの中にあるので実施している、との回答もあった。

（3）保育実習Ⅰで今後体験させたいこと（現在も心がけていることも含む）

今後、まず最初の段階である保育実習Ⅰではどのような体験をさせたいと考えているかということについて質問し、以下のような回答を得ることができた。

- ・仮の子どもの事例を作成し、援助の方法を学生に考えさせる。どのようにアセスメントするかを考えさせる。
- ・10日間の実習期間では短く難しいが、プロセスレコード、一人の子どもの行動に対して自分がどう働きかけたかということ振り返るという課題を検討している。
- ・児童養護施設についての理解、基本的なことの理解を従来も心がけているが、今後増々促していきたい。授業やテレビ等だけでは「暗い」「非行」「問題が頻繁に起きている」といったようなイメージをもっている。このようなイメージを改善してほしい。常時、難しい問題が起こっているわけではない。
- ・児童養護施設に興味関心をもってもらえるような機会を提供していきたい。子どもとどンドン遊び

こんでもらうことによって関心をもってもらいたい。

- ・楽しい体験をたくさんしてほしい。行事など、積極的に参加する機会を提供したい。
- ・保育士の専門性は発達をしっかりと見極められるということだと思っている。子どもをみて「発達課題の積み残しはどういったことにあるのか」ということを見極めていくために話し合いの場をもちたい。
- ・実習生が高い目標を持ちすぎて、苦しんでいることがある。子どもの関係性の中で悩まなくてもよいと思っている。またあえて苦手な子どもには近づかなくてよい、ということ伝えてる。それほど、子どもへの対応は難しいものであると思う。
- ・児童養護施設は子どもが安心して暮らしているところであり、実習生はそこに少しの間邪魔させてもらっているという存在である。近くにきた子どもと接してみる、かかわってみる、ということも体験として重要である。そこから将来このような場所で働きたいという期待値をあげるように考えている。
- ・「実習に積極的に取り組む」という姿勢は、直接子どもとかかわるということでもなくともよい。ただし、職員には積極的に質問してほしい。児童養護施設を知るという意欲につなげてほしい。1日の実習を終えて、「何か質問はないか」と尋ねて、「ない」といわれれば、学びはそこで終わってしまう。
- ・ある場面における子どもとの一つの関わりの中で、自分が学べたという一瞬があれば、それを整理していく。そのためには、子どもの観察力をあげる。例えば、子どもの言葉をしっかりと聞く。具体的には子どもが何を語ったのかを把握する。学校から帰った子どもの様子はどうかをよく見る。そこにどれほどアンテナをたてることができるか。情緒的に不安定な子どもをどのように職員が援助しているか。ここで何が起きているか、何がここにあるのか、その集中力をしっかりとあげる。自分は何ができるのかではなく、ここで何がおこっているのかを観察する。子どもの会話だけで家族が見えたり、子どものパワーバランスが見える。現場で何が起きているのかを見る力が大切である。それが質問につながり、学びにつながる

と考える。

(4) 保育実習Ⅲで体験させたいこと（現在も取り組んでいることも含む）

次に、上位段階である、保育実習Ⅲで今後体験させたいと考えていること、充実させたいと考えていることについて質問をした。

下記のような回答を得ることができた。

- ・学生のニーズに応じて、仮の子どもの事例を作成し、学生に考えさせる。どのようにアセスメントするか考えさせる。
- ・2週間という短い実習期間では難しいが、プロセスレコード、一人の子どもの行動に対して自分がどう働きかけたかということ振り返るという課題を検討している。
- ・色々体験させたいと思うが、事例の詳細な説明は難しいと思っている。家庭環境がわかったからといって生活の中でのかわりが変わることはないと思っている。また守秘義務もある。生活が流れるようにするためにはどのように配慮をしているのか、安心した生活のための配慮はどうあるべきかを見て、あるいは実践して学んでほしい。
- ・個別支援計画をぜひ作成したいのであれば保育実習Ⅰでも保育実習Ⅲでも実施できればと思うが、社会福祉士の実習であれば4週間で作成していくものであるが、保育実習は各10日間なので難しいと思う。
- ・保育実習Ⅰで回答したことと同様だが、保育士の専門性は発達をしっかり見極められるということだと思っている。子どもをみて発達課題の積み残しはどういったことにあるのかを見極めていくことを話し合う機会をもちたい。
- ・保育士養成課程の保育実習シラバス（厚生労働省）を網羅するのであれば、カリキュラムをつくる必要があるのではないか。社会福祉士は例えば、個別援助計画を作成するなどといったカリキュラムがある。実習生の積極性に任せているところがあるが、それだけでは、シラバスの目標をクリアするのは難しい。例えば、ケースワークに参加する回数を規定する、などといった具体的なカリキュラムが必要だと思う。現状では、実習生から質問があれば、子どもの背景や特性などを丁寧に説明している。子どもとの個別の援助・かわりは、

日常の中で経験できる。学生がどうとらえるかが課題である。

- ・以前、実習記録を書く課題として、「今日はポジティブなことしか書いてはいけない」という一日を設定した。子どものいいところに目を向けることを大切にしたい。見る視点を設定し、書く内容について具体的に提示した方がいいのかもしれない。

(5) ご自身が実習で体験してよかった経験

調査協力者自身の実習体験を振り返って、どのような経験がプラスになっているかを把握するため、聞き取りを行った。

以下のような回答が得られた。

- ・児童養護施設職員の姿勢を学ぶことができた。実習先の職員がとことん質問や疑問等に答えてくれた。
- ・実習中9割が子どもと関わった。ケアワークの実習をとことんするなかで、児童養護の現場であるということはケアワークをとことんすることだと実感できた。
- ・ひたすら子どもと遊んだ。一緒に過ごした。肯定的体験をたくさんさせてもらえた。
- ・一般病院と精神科の病院でソーシャルワークの実習をさせていただいた。ある困難なことがあったが、それが現場であると思えた。大学でもしっかりとフォローの指導があった。
- ・実習の中身より、職員との関係性が大きい。実習で子どものかかわりが難しくても、職員に守られていれば、頑張ることができる。実習記録をみて実習生の辛さを知ることがあり、慌てて声をかけることがある。いずれにしても、記録を書く力が必要だと思う。観察力とキャッチする力が重要である。

(6) ご自身が実習で体験して困難に思った経験

先の質問とは逆に、調査協力者が実習で困難性を感じたり、疑問に感じたりしたことを聞くことで、協力者の実習体験の理解を深められるよう、質問を行った。以下のような回答が得られた。

- ・フロアに先生がおられないときの子どもの対応に困った。具体的にはフロアに先生が不在の時、パ

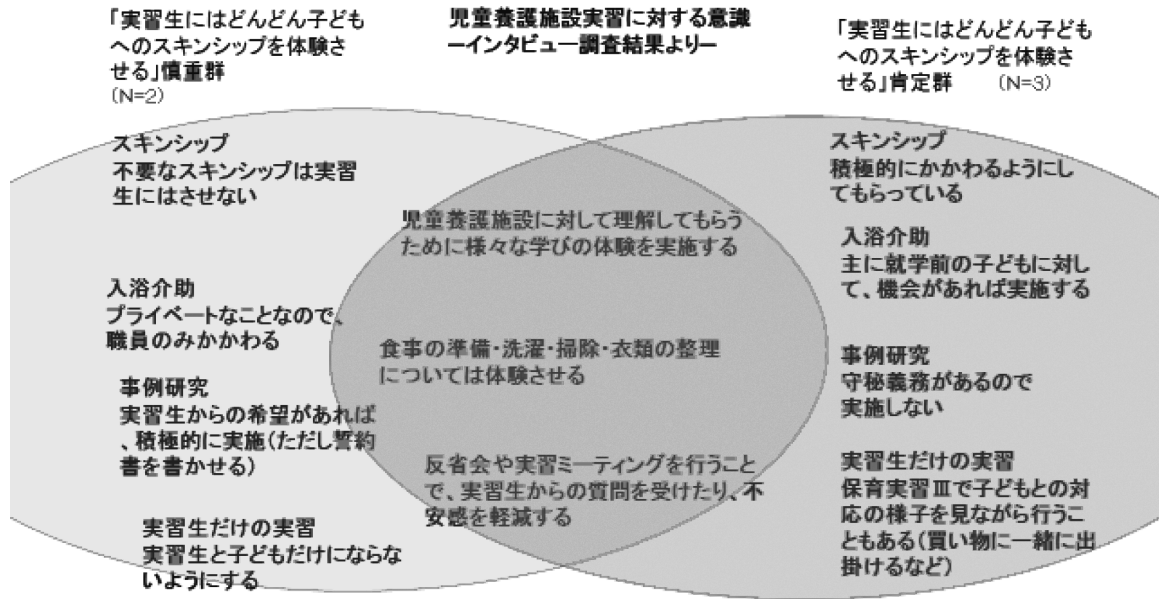


図-1 「実習生には積極的に子どもへのスキンシップを体験させる」肯定群と慎重群との比較

ニックを起こした子どもへの対応に困った。

- ・特に思い浮かぶことはないが、もし当直をしてほしい、と言われたら困っただろうと思う。
- ・子どもととことん遊ばせてもらったが遊んでばかりでいいのかな、と思ったことはある。
- ・一般病院と精神科の病院でソーシャルワークの実習をさせていただいた。現場で行われようとした援助計画が「そのようなことでよいのか」と思うような内容であった。現場の先生に質問もしたが、理解してもらえなかった。しかしそれが現場であると思えた。大学の先生が事後指導でフォローして下さった。

(7) 「実習生には積極的に子どもへのスキンシップを体験させる」肯定群と慎重群との比較

質問項目にいくつか回答していく中で、「実習生には積極的に子どもへのスキンシップを体験させる」という実践内容について、肯定的に考えている施設と慎重に考えている施設があった。そこで両者にみられた一定の傾向を示したものが、図-1である。

肯定群は「子どもとどんだん接して体験してほしい」という意見で共通していた。そしてその一環で「お膝に座って抱っこ」「就学前の子どもを中心に機会があれば入浴介助の体験」といったことも積極的に実践してもらい、とのことだった。その一方で、例えば事例研究といったことには慎重であった。子どもの家庭環境等を伝えることも困難であると考え

ていた。一方慎重群は「入浴の介助等は子どものプライバシーに触れることなので実習生には体験させない。職員が行う」ということであった。そして事例研究等については守秘義務を全うする、という条件付きと誓約書を書かせることで、慎重には取り扱いつつ、学びにもつながるので説明することもある、ということであった。

6. 考察

調査結果としては、保育実習Ⅰでは、児童養護施設について事前に十分理解していない実習生が多いことに鑑みて、「楽しい体験」「肯定的場面で子どもとかかわること」を積極的に体験してもらおうという回答が得られた。また、「子どもの関係性の中で悩まなくてもよい」「苦手な子どもには近づかなくてよいということ伝えてる」という回答も得られた。一方、保育実習Ⅲでは、「病院や買い物の付き添いなど、経験のある実習生には体験してもらっている」「コモンセンスペアレントトレーニングや個別支援計画の概要を伝え、支援や子どもへの働きかけについて、意味づけがあることを伝えるようにしている」という意見があった。「本来であれば、個別支援計画を立ててもらうことも実施していきたいが、保育実習Ⅲの期間だけでは、子どもを理解するには短いため難しい」という回答もあった。

実習生の子どものスキンシップについて、慎重にとらえている施設と、積極的に実践させる方向性をとっている施設があったが、肯定群は実習体験と

して「ケアワークを積極的に実践する」ことに重きを置き、慎重群は「ソーシャルワークの学びを少しでも深める」ことに重きを置いている印象であった。そして両者共通していたことは、「児童養護施設について正しく理解してほしい」「衣食住の環境を整えることなど、生活の基本的なことの大切さについては体験して理解してほしい」「実習生には安心して多くを学んでほしい」といったことであった。

児童養護施設における実習は、集団ではなく、子どもの個性に配慮した関わりから実習生が学ぶことが多く、そこから、今回の研究テーマである「施設保育士の専門性」がみえてくると考える。今後は、実習を終えた学生にアンケート調査を実施し、その学びの内容を整理するとともに、今回のインタビュー調査で得られた結果をもとに「施設保育士の専門性」について考察していく予定である。

おわりに

今回の調査では、保育士養成課程における保育実習のあり方について、実習の受け手である児童養護施設の職員にインタビュー調査を実施した。その際、実習担当の先生方にご協力いただいたが、そのほとんどが「社会福祉士」の資格取得の方々であった。今後、社会福祉士の方に加え、「保育士」資格の先生方にも同様のインタビュー調査を実施していきたいと考える。そして「ご自身がどのようなプロセスで施設保育士を目指すことになったか」「施設保育士として、実習をどのように考えているか」ということについて、インタビューを通して把握していきたい。また、学生の「施設保育士」や「実習」に対する意識についてもインタビュー調査やアンケート調査等で把握していきたいと考える。

引用文献

- 1) 全国保育士養成協議会編 保育実習指導のミニマムスタンダード—現場と養成校が協働して保育士を育てる— 北大路書房 2007年 p.2
- 2) 前掲 1) p.2
- 3) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 児童養護施設入所児童等調査結果(平成25年2月1日現在) 2015(平成27)年1月 p.10
- 4) 橋本好広「保育士養成における施設実習研究の現状について」『近畿大学豊岡短期大学論集第10号』2013年 pp.27-32
- 5) 中島健一朗「養護系施設での実習を通じた、学生の意識変化に関する一考察—学生インタビュー調査を通して考える」『長崎短期大学研究紀要第23号』2011年 pp.21-27
- 6) 岡田恵子「保育科学生の施設実習における生活支援に関する自己効力感と実習達成感との関連—障害系施設と養護系施設との比較を通して」『川崎医療短期大学紀要28号』2008年 pp.65-70
- 7) 池田幸代・田中謙・前嶋元「保育者養成校の施設実習における学生の学びの内容の分析」『高等教育と学生支援：お茶の水女子大学教育機構紀要』2013年 pp.54-61
- 8) 高井由起子「施設内虐待防止力の涵養に関する一考察」『大阪社会福祉士第18号』社団法人大阪社会福祉士会 2012年 pp.12-20
- 9) 趙正祐「児童養護施設の援助者支援における共感満足・疲労に関する研究—CSFの高低による子どもとの関わり方の特徴から」『社会福祉学55号1巻』2014年 pp.76

参考文献

- 森知子「保育専門職としての意識を高める児童館実習の学び—保育士養成課程における保育実習Ⅲの位置づけから」『聖和論集第39号』2011年 pp.27-35
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(雇児発0808第2号) 2013(平成25)年

謝辞

今回のインタビュー調査につきまして、ご協力いただきました児童養護施設の先生方には大変お忙しいところ調査ご協力いただきました。記して感謝申し上げます。また、園田学園女子大学 原田旬哉先生には調査実施にあたり、大変有益なご指導をいただきました。誠にありがとうございました。

附記

本調査研究は平成26年度全国保育士養成協議会ブロック研究助成金による研究「養護系の福祉施設における実習生の学習課題の検討」の一部である。

また、本研究は日本保育学会第68回大会におけるポスター発表、「児童養護施設保育士の専門性にかかわる一考察—児童養護施設職員への保育実習に関するインタビュー調査結果から」を大幅に加筆、修正したものである。